

聴覚障害児童が動画等を閲覧して自ら日本語を習得する姿を目指した実践研究

宇治川雄大(山形県立山形聾学校 教諭)

1. 研究の背景と目的

聴覚障害児童が日本語の学習で日記に取り組むときに、①自ら日記を書こうとする気持ちが低い、②家庭での支援方法が分からず悩む親が多い、③日記の指導方法や手話が分からず悩む教員が多いという3点の課題が複合的に起こっている現状がある。この複合的な課題を踏まえ、本研究では、聴覚障害児童が自ら学ぼうとする主体性に視点を当て、動画等の閲覧によって意欲的に取り組む日記の学習を通して、日本語の習得を促す支援の有効性を検討することを目的とした。

2. 研究の対象・方法

了承を得た5名の聴覚障害児童及び保護者、担任する教員を対象とした。本研究では、児童の手話文法の獲得状況及び日本語の習得状況の実態把握及び評価、タブレットを貸し出して家庭で日記に取り組む実践、保護者へのアンケートや聞き取り、感染対策を講じた上で家庭訪問を実施した。また、担任には情報共有や研修会を実施し、最後にアンケートを取った。動画の作成等については、特別支援学校(聴覚障害)に勤務する教員が取り組みやすい方法を重要な視点として検討した。

3. 結果及び考察・成果

3.1 動画等を閲覧した実践

週末に児童へタブレットを貸し出し、2020年7月の第1期から2021年7月の第3期まで実践に取り組んだ。その結果、日記に自分の思い通りに書くことが苦手な聴覚障害児童に対しては、日記の学習をコミュニケーションの一形態として捉え、親や教員とのやりとりを通して日本語に表したことを日記に書く共同学習と自分自身との対話の積み重ねが、日本語を習得していく過程において重要であることが分かった。また、親子や教員とのコミュニケーションのきっかけや深化させるときに、筆者が作成した動画等が有効に作用することも明らかになった。加えて、筆者が児童への個別具体的な動画等を作成及びメッセージングアプリケーションを活用して送信し、それを家庭で親子一緒に閲覧することで円滑なコミュニケーションが生まれ、児童が主体的かつ能動的に日記を書くという行動が発現することも分かった。

3.2.1 対象児童への実態把握及び評価

各実態把握の中で、対象児童の書いた日記の変化を比較すると、児童全員が日本語で表現する文法項目等の種類を増やすことができた。また、研究前に比べて研究後の日記の方が詳しく書くことができた。具体的には、経験したことを詳しく書くこと、自分の気持ちや感想を詳しく書くこと、順序立てて書くこと、会話文を取り入れて書くことができるようになった。

3.2.2 対象児童保護者への実態把握及び評価

保護者へのアンケートや聞き取りの結果より、動画等の閲覧により親子のやりとりが増えたことが分かった。具体的には、動画等をきっかけに児童へ日記の学習を促す声掛けがしやすくなったこと、児童が日記にどう書くか迷ったときに動画等を参考にしてやりとりできるようになったこと、動画を閲覧して保護者自身の手話の学習に繋がったことが挙げられた。

3.2.3 教員と情報共有及び評価

教員へのアンケートの結果より、動画を参考にして児童への日記の指導に生かすことができたことが明らかとなった。具体的には、動画の筆者の話し方を参考にできたこと、動画を閲覧して視覚情報の作り方や提示の仕方、タイミングを参考にできたこと、動画をきっかけに児童との話題作りやコミュニケーションを深めるときに生かすことができたこと、授業で動画を活用できたことが挙げられた。

3.3 動画作成及び編集や公開、閲覧

動画の作成では、児童の普段のコミュニケーションの特徴を把握して作成したことで、家庭での学びの保障に繋がった。動画の編集や公開では、編集を文字入れのみと最小限にし、ホームページと連携させてYouTubeで公開する方法が有効であった。ただし、YouTubeの年齢制限に気を付ける必要がある。家庭で動画を閲覧する際は、端末の使用時間の制限、使用できるアプリケーションの制限、閲覧できるWebサイトの制限、児童が自由に操作できる機能の制限等が、安全に使用するために必要な設定であった。



本研究で作成した
ホームページは
こちら。

4. 今後の課題

自力で経験や考えを自由自在に日記へ書くことのできる聴覚障害児童には、自分の書いた文章を自分で正しいか確認できる仕組みと、それに合わせた動画や学習プリント等を作成することが有効と考えられ、今後検証する必要がある。